

即興型ディベート

研究報告集

Research Report of PDA Conferences

オンライン開催

2020年8月8日(土)



一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会

Parliamentary Debate Personnel Development Association (PDA)

目次

【即興型ディベート研究報告集】

- No.1 はじめに ～With コロナ時代の即興型英語ディベート～
大阪府立大学／一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会 中川智皓
- No.2 青森県立青森高等学校即興型ディベート研究報告書
青森県立青森高等学校 當麻進仁 教諭
- No.3 岩手県一関第一高等学校即興型ディベート研究報告書
岩手県一関第一高等学校 熱海千乃 教諭
- No.4 岩手県立盛岡第一高等学校即興型ディベート研究報告書
岩手県立盛岡第一高等学校 久保田奈奈 教諭
- No.5 Critical Thinking の育成における中高での連携
栃木県立佐野高等学校 川俣海瑠 教諭
- No.6 東京都立小石川中等教育学校即興型ディベート研究報告書
東京都立小石川中等教育学校 末佐和子 教諭
- No.7 オンラインシステム(Zoom)を利用した英語ディベートの指導と普及の可能性
聖光学院高等学校／高校生世界大会日本代表ヘッドコーチ 河野周 教諭
- No.8 生徒の視覚的材料の活用と持続的な指導方法を考える
神奈川県立平塚江南高等学校 佐藤亮介 教諭
- No.9 富山国際大学付属高等学校即興型ディベート研究報告書
富山国際大学付属高等学校 Darren Hamilton 教諭
- No.10 長野県松本県ヶ丘高等学校即興型ディベート研究報告書
長野県松本県ヶ丘高等学校 池上博 教諭
- No.11 即興型英語ディベート授業導入研究報告
三重県立四日市高等学校 田中貴義 教諭
- No.12 福岡県立城南高等学校における即興型英語ディベート実践
福岡県立城南高等学校
- No.13 熊本県立第二高等学校即興型ディベート研究報告書
熊本県立第二高等学校 平井和仁 教諭

はじめに

～With コロナ時代の即興型英語ディベート～

大阪府立大学 工学研究科 中川智皓
(一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会 (PDA) 代表理事)

新型コロナウイルス感染症への対応として、オンラインでの活動が拡大しています。2020年3月の第3回PDA中学生即興型英語ディベート全国大会も初のオンラインでの開催となりました。また、多くの大学においては、オンライン授業で前期が終えられる形となっています。社会においても、出張が激減、オンライン会議が標準になってきています。

昨年の本報告集では、「様々なものがインターネットとつながり、瞬時に物事が進んでいく変化の急速な社会においては、時間資源もますます貴重になっていくと考えます。日本においては、働き方改革など教育現場においてもどのように時間を配分していくか転換期に差し掛かっているのではないのでしょうか。」と寄稿させていただきました。Withコロナ時代への突入で、ますますオンラインシステムを使いこなし、時間資源を有効に活用できる力が必要になりそうです。新しいシステムを使うことには不安や戸惑いもあると思います。しかし、急速に変化するこの時代において、新しい技術について学び、知識をアップデートし、臨機応変に対応、挑戦できるよう日々学んでいくことは、オンラインでの活動を無視できない社会におけるマナーとなるでしょう。

今年度で7回目となるPDA全国高校 即興型英語ディベート合宿・大会も、オンライン開催の運びとなりました。本合宿で取り扱う即興型英語ディベートは、コミュニケーション場の仕組みが明確化されており、オンラインで取り組みやすい活動です。対面で握手できないのは残念ですが、画面を通して相手に敬意を払い、議論を深めていただけましたら幸いです。そして、ここで鍛えた力が、新しい社会に親和性を持って、活用されますことを祈念しています。

謝辞 公益財団法人 日本財団、公益財団法人 KDDI 財団、文部科学省、大阪府立大学ほか、多くのご支援をいただきました。ここに感謝の意を表します。

※ここでは、パーラメンタリーディベートを通常授業（50分）に導入できる形式にアレンジしたものを、なじみやすい・理解しやすい表現として、即興型英語ディベートと呼んでいます。

パーラメンタリーディベートは、古くから世界で行われてきている議論の訓練方法ですが、それを日本の一般的な生徒が実施できる形式に、「システム」として落とし込んだ点がここでの特長です。ルールやスピーチシートをはじめとする考案したシステムは、単に一般的なパーラメンタリーディベートを簡素化したという位置づけではなく、議論の仕組みを整理し、教育的効果を高めるためのデザインが組み込まれています[1]。ルールの一つ一つ、また教材の一つ一つに、なぜそのように設計したか理由があります。対話空間のメカニズムデザイン（制度設計）の観点からも、ディベート実践の「分析」と「設計」の両方の思考を持って、よりよい授業展開につなげることは重要です。本合宿でのディベートおよびジャッジ実践や他校の教員の皆様との情報交換を通して、即興型英語ディベートを実施することの本質を見定め、各校での授業につなげていただければ幸いです。

[1] 中川智皓、山内克哉、新谷篤彦、パーラメンタリーディベート（即興型英語ディベート）における議論の整理と評価の一考察、システム制御情報学会誌、Vol.32, No.12, (2019), pp.446-454.

青森県立青森高等学校即興型ディベート研究報告書

當 麻 進 仁
青森県立青森高等学校

(1)はじめに

本校では口頭による英語表現に特化した学校設定科目「表現探究（1単位）」を、文型生徒2年生全員を対象に平成29年度より実施しているが、今年度から即興型ディベートを1学期後半から2学期中盤まで実施することとなった。

(2)実践内容

1クラス40人を3～4人のグループに分け、12グループがGovernment, Oppositionに分かれる。ディベート導入直後は3分間話し続けることのできる生徒がいないため、各スピーカーの発話は2分にとどめている。以下が授業の流れである。

Greeting・Topic発表（2分）

Preparation（15分）

第1ラウンド（12分）

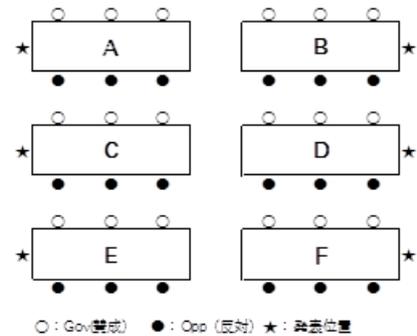
A、D、Eテーブルが対戦/B、C、Fテーブルがジャッジ。

勝敗検討～発表（2分）

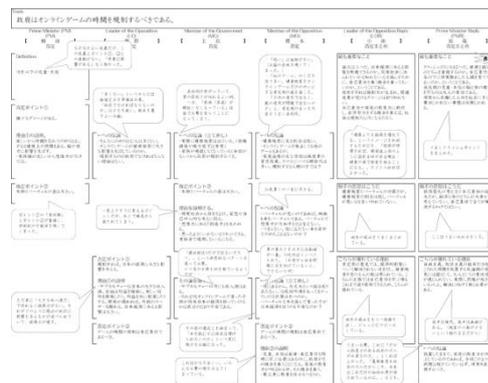
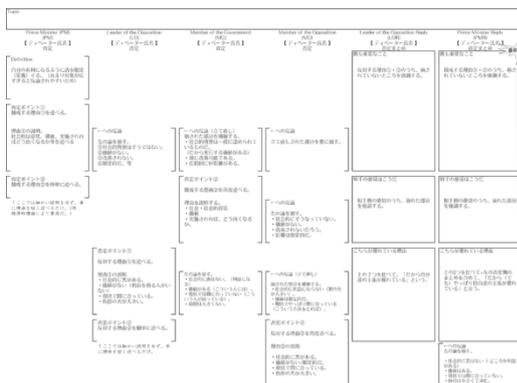
ジャッジの総意により勝者を決定。勝敗の理由を述べる。

第2ラウンド（12分） ・ 勝敗検討（2分）

まとめ（5分）



導入に当たっては、発言の際に抑えるべきポイントを記したフローチャートを準備した。また、これとは別に実際の発言と解説を記したフローチャートも生徒に配布している（下図参照）。



(3)まとめ

本校の生徒には Claim, Reasoning までの理解はあるが、Warrant の考え方が定着しておらず、即興型英語ディベートを用いてその理解が深まったと考えている。この論理的に自分の考えを述べる活動は Writing の内容の濃さにもつながっている。また、ジャッジをとおして、聞きながら取るメモの量が格段に増え、整理しながら話を聞く力も身についてきたようである。加えて、言いたいことがうまく言えなかったという経験が学習の強い動機づけになっていると考える。

岩手県一関第一高等学校即興型ディベート研究報告書

熱海 千乃

岩手県一関第一高等学校

(1) はじめに

本校は、岩手県内唯一の公立中高一貫校であり、併設されて12年目を迎える。中高ともに、授業でディベートを取り上げ、毎年2月には中学3年生と高校2年生の交流ディベートを開催している。ディベート以外にも、年間を通して中高の交流を行うよう心がけている。

(2) 実践内容

中学3年次に準備型のフォーマットでサマリーなしの簡易ディベート体験する。学年によってやや実施形態は異なるが、高校1年次に準備型のフォーマットで身近な論題を取り上げ月に1回程度ディベートを行う。高校2年次以降はPDA即興型のフォーマットを利用して、社会的な問題に関する簡単な英字新聞記事などを利用しながら、社会的な論題でディベートを行えるようにシフトしていく。準備型から即興型のフォーマットに移行していく際に、生徒には若干の戸惑いが見られるが、回数を重ねるに従って、即興型のフォーマットにも慣れていき、むしろ様々な役割を担えることを楽しむ余裕も見られるようになった。

2020年2月25日に中高交流ディベートを実施した。今回は、初の試みとして高校2年生文系2クラスと中学3年生1クラスを合同で実施し、合計126名での交流ディベートを行った。それぞれのクラスから1名ずつディベーターを出し、高校生2名、中学生1名で1チームを組んだ。グループ分けには細心の注意を払い、中学校教員とも相談しながら、生徒の個性や英語力に応じて満足した試合が行えるようチーム編成を工夫した。50分間の授業内で完結するように、準備時間15分、スピーチ時間一人3分(計18分)、振り返り(10分)を目安としてディベートを行った。

【交流ディベートの様子】



(3) まとめ

終了後のアンケートでは中高生ともに満足度は高かった。高校生からは「もっと語彙や知識を増やしたい」、中学生からは「高校生のように話せるようになりたい」など前向きな感想が多く見られた。高校生が中学生に対して、積極的に話しかけ意見を吸い上げようとする姿勢や、話すべき内容を丁寧に教えている姿も垣間見られ、相互に良い学び合いを深められていた。今後は、ディベートを本校英語教育の柱の一つとして、カリキュラムの中に位置づけていく必要がある。また、コロナ感染症蔓延により、授業ではディベートを行いにくなっているが、今後も工夫しながら実践を重ねていきたい。

【参考文献】「授業でできる即興型英語ディベート」(中川智皓著)、「ディベートを導入した授業実践～発表力・考える力をつけるための指導ステップ～(DVD)」(ジャパンライム)など

岩手県立盛岡第一高等学校即興型ディベート研究報告書

久保田 奈奈

岩手県立盛岡第一高等学校

(1)はじめに

本校では、ALTの授業を通して即興型ディベートに取り組んでいる。教授を一元化することで、教師間の温度差や個人の負担感の軽減につながっている。この方法をとってから約4年が経過した。どの英語教員も英語ディベートに触れることとなり、3年間の見通しを共有しながら授業ディベートに取り組んでいる。

(2)実践内容

(ア) 1 年次

1 期は Paragraph writing を OREO format に基づいて指導し、Constructive Speech の作成につなげている。2 期は Attack speech、3 期は Defense Speech と段階を踏んで導入し、その都度模擬試合を行っている。現段階では時間を短縮した簡易形式で実施しており、PDA フォーマットの導入には至っていない。

しかし、ディベートの形式に慣れるにつれ、論理的な考察や組み立てを意識するようになり、より説得力のあるスピーチを目指す生徒が増えていると実感している。また、チームで取り組むため、英語に苦手意識がある生徒もサポートを受けながら学習に励んでいる。

最終的には、ジャッジに求められる論理的判断の素地を育みたいと考えており、今年度より試行する予定である。

(イ) 2 年次

1 年次の既習事項を復習した上で、より客観的でより論理的な議論を追求する。Resolution を身近な話題から社会的なトピックへと推移させ、生徒の知的好奇心に合致させるように心がけている。

(3)まとめ

本校における授業ディベートは確実に進化を遂げている。大学受験に必要な技能だと認識されたことが大きな要因であろう。今までは、英語部の一部の生徒が活躍する場であったが、すべての生徒が取り組んだことで、論理的思考や客観的判断の育成に効果的であり、スピーキングのみならずライティングの訓練にも適していると、多くの教員が実感している。新しい学びの手段に理解のある教員が多く在籍していることにも後押しされて、本校のディベート教育は新しいフェーズに入りつつある。1 年計画から 2 年計画へ拡張し、本校のディベートティーチングメソッドが確立し始めている。展望としては、PDA 形式で全生徒がディベート活動をできるようになるのが目標である。

Critical Thinking の育成における中高での連携

川俣 海瑠

栃木県立佐野高等学校

(1)はじめに

本校は、附属中学校を併設する中高一貫教育校である。「国際人として活躍する真のリーダーの育成」を教育目標に諸活動に取り組んでいる。今回は、学校設定科目である「Critical Thinking Program (CTP)」を中心に、中高で連携をしながらどのように論理的・批判的思考力を育成しているかを紹介する。

(2)実践内容

CTPは週に1回授業が行われ、中学と高校で内容が以下のように設定されている。ディベートの他にも探求活動やプレゼンテーションを行うが、今回はディベートの部分のみを抜粋する。

中学1年	初めての日本語ディベート「中学生に携帯やスマートフォンは必要ではない」 →1～3月に実施。ディベートの形式に慣れることを主眼に、同一テーマで試合を繰り返し行う。通常、即興型ディベートは3人で1チームとなるが、6人で1チームとし、生徒1人あたりの負担を減らす。
中学2年	日本語ディベート「日本は全ての飲食店に対し店内での全面禁煙を義務づけるべき」 →7～10月に実施。1年次では試合の形式に慣れることや、決められた時間内で話すことを主眼にしたが、2回目となる2年次では、試合内容に重点を置き、論理的・批判的思考力を養う。
中学3年	初めての英語ディベート “Traveling abroad is better than domestic travel as a graduation school trip.” “We should stop English education as a subject in elementary schools” →7～3月に実施。中学1、2年次での経験を生かし、英語での試合に挑戦する。英語でのディベートに慣れることを主眼に置く。
高校1年	日本語ディベート「日本は消費税をさらに上げるべきだ」など →7～12月に実施。中学では同じテーマで複数回試合をしていたが、高校では1テーマにつき1試合。高校から入学した者も含め多くの論題に触れて知見を広げる。 英語ディベート “Japan should ban any online games.” など →1～3月に実施。中学では同じテーマを複数回試合していたが、高校は1テーマにつき1試合。他教科と関連した論題に触れて知見を広げる。

(3) まとめ

以上のように、本校では中高連携して生徒の論理的・批判的思考力の育成に尽力している。日本語ディベートを経てから英語ディベートに繋げるなど、中学から段階的に指導を行い、論理的・批判的思考を繰り返すことで、着実に力を伸ばすことができている。

東京都立小石川中等教育学校即興型ディベート研究報告書

末 佐和子

東京都立小石川中等教育学校

(1) はじめに

本校では、教養主義、理数教育、国際理解教育の3本柱を中心に教育活動を行なっている。国際理解教育の一環として、授業や部活動においてディベート活動を行なっている。

(2) 実践内容

本校では、4年生と5年生（高校1年生と2年生）の授業と高校生の部活動において、即興型ディベートを実践している。

1、コミュニケーション英語/英語表現

- ① 授業で扱った教科書や副教材の長文に関連する論題を提示し、代表者がディベートを行う。代表者以外のクラスの生徒は、フローシートにメモをさせる。試合終了後は、試合内容についてクラス全体で議論する。ディベート終了後は、ディベートと同じテーマでエッセイライティングに取り組みさせる。年間を通して、全員がディベートの試合を経験するようにする。
- ② 論題を提示し、ペアで即興でミニディベートを行う。時間を与えて、即興で議論をし、ペアや4人グループでミニディベートを行う。

2、英語研究会

部員同士で試合を行い、顧問や卒業生がジャッジをし、コメントをしている。

昨年度発足したばかりであり、今後さらにチーム力を高めて、技術力と将来社会でリーダーになるための資質を高めていく予定である。

参考文献

- ・『授業でできる即興型英語ディベート』中川 智皓
- ・『英語ディベートー高校授業用テキスト（教員用）』小林 良裕
- ・『図式で攻略 英語スピーキング』森 秀雄

(3) まとめ

ディベート活動を通して、物事のメリットとデメリットの両方を現状しながら、日本や世界の課題に対して、解決策を提示し、新しい価値観の創作に繋げていくことを目標としている。そういった力が、将来自分の夢を追うというだけでなく、社会に貢献する力に繋がると考えている。

オンラインシステム(Zoom)を利用した英語ディベートの指導と普及の可能性

河野 周 (Kawano Amane)

聖光学院高等学校 / 高校生世界大会日本代表ヘッドコーチ

(1) はじめに

コロナ禍の影響で社会全体が混乱に陥った一方で、英語ディベート教育においては一つの光名が差した。それはオンラインシステム(Zoom)の普及である。様々な部活の練習や大会が禁止になる中、ディベートだけはオンラインを通して、大会も継続して行われた (e.g., PDA中学全国大会2020)。つまり、オンラインシステム(Zoom)は、英語ディベートの指導や普及において、大きな可能性を示したと言える。ここでは、自身の経験を元に、オンラインシステム、特にZoomが持つ特有の機能を活かして、効果的に英語ディベートを指導・普及する方法について述べていきたい。

(2) 実践内容

- ① **共有機能**：Zoom では一人の PC の画面を全員に共有する機能がある。例えば、パワーポイントやタイマーを全員の画面に写すことが可能である。パワーポイントに関しては、このおかげで、プレゼンテーションを容易に行え、授業導入において、ディベートのルールやスキルについて簡単に指導することが可能となる。タイマーに関しては、試合進行の時に非常に便利で、生徒には時間を意識させてスピーチをさせることだけでなく、画面を見ることも意識づけられる。それはジャッジを見る(アイコンタクトをする)という習慣を身につけさせることにもつながれると言えるだろう (補足：Zoom はカメラの機能があり、お互いの顔が見られる)
- ② **チャット機能**：Zoom には参加者が互いにテキストメッセージを送ることのできる機能がある。このおかげでレクチャー中でも質問が簡単にできるだけでなく、試合中においては選手間で意思疎通を図ることができる。またこのチャットでは、ファイルを送ることも可能である。授業導入時のレクチャー資料や試合に必要な資料(スピーチシート/単語リスト)も、ペーパーレスの形で相手に簡単に送信することができるため、オンライン上でディベートの指導が効率的にできるだけでなく、エコにも配慮した教育が可能となる。
- ③ **ブレイクアウトルーム機能**：さらに Zoom には、ブレイクアウトルームという「小部屋」を作る機能がある。このおかげで、試合前の「準備」や「試合自体」を複数の部屋にて同時並行で開催することが出来る。さらに、この環境においては、教室内で複数の試合をするよりも、静かな場所で試合をすることが可能で、オフラインのディベートよりも質の良い状況の中で試合ができ、初心者にとってもディベートになじみやすい環境であると言える。

(3) まとめ (オンラインディベートの可能性)

こうした Zoom がもつ特有の機能を評価すると、コロナの影響が少しずつ収まった状況においても、Zoom を利用した英語ディベートは、今後も継続されるべきではないかと考える。さらに、上記で述べなかった点として、Zoom があれば、教室外ともつながることができ、他県や他国の生徒と、授業内に試合ができるというメリットもある。実際、授業内ではないが、自粛期間中に、全国の各学校が Zoom を通して試合を行っただけでなく、英語ディベート高校生世界大会の日本代表も、過去に世界大会で優勝経験のあるシンガポールや中国などの世界強豪国とも試合を行うことができ、非常に貴重な経験を積むことができた。これは、コロナの問題が生じる以前には全く考えられなかったことで、オンラインシステム(Zoom)はまさに、英語ディベートの指導と普及に大きな可能性を示したのではないだろうか。

<補足：著者の自粛期間中 (3 ヶ月) のオンラインでの活動>

オンラインディベート練習会 (約 50 回開催) / オンラインディベートワークショップ (12 回開催)

オンラインディベート大会運営・アドバイザー (英語ディベート全国大会・日本語ディベート全国/国際大会)

生徒の視覚的材料の活用と持続的な指導方法を考える

佐藤 亮介

神奈川県立平塚江南高等学校

(1) 授業実践

主に2年生の授業で、年に3～5回授業の中でディベートを行ってきている。ルール説明をしたのち、PDAスタイルで実際に試合をさせている。40人規模のクラスを5～6グループに分け、ジャッジも置いて実施している。授業における実践回数は多くはないが、ここ数年の実践を踏まえて昨年度は新たな形に挑戦した。

その形では、他のグループの声や音でスピーカーの声が聞こえない、という問題を避けるため、また、ジェスチャーや視覚材料を使った表現力を養うため、スピーカーは絵、図、キーワード等を大きな紙に書いてそれを見せながらスピーチすることも奨励されている。生徒はスピーチに加えて、どう視覚に訴えれば良いかを様々に工夫していた。この方法はもう少し続けていきたい。

今年度希望者約30名を対象に、PDAスタイルのディベートのルール及び論理の組み立て方に関するパワーポイント資料を作成し、Googleのmeet（オンラインビデオ会議ツール）を用いて説明および、生徒同士の実践練習を定期的に行っている。実際に指導をしてみて資料の改善点や、指導する順番にも課題が見えてきた。徐々に授業が再開されている中で、どう日々の授業に導入していくのかを現在検討中である。

(2) 今後の展望

①ディベートのルールや論理の組み立て方等について動画を作成し、毎年1年生の授業にディベートを導入する際に使えるようにする。新着任の先生方でもスムーズにディベート指導を始められる基盤を作る。

②段階的な指導計画と指導用教材を作成する。（現在はルールを教えていきなり試合をさせている）

③トピックによっては、準備型ディベートのように、Motionを発表した後、グループで調べる時間を数日与え、より社会性の高いトピックに関して知識を広げた上でディベートをさせる、ということにも挑戦したい。即興性とMotionの深い分析等、毎回目的を明確にして授業を組み立てていきたい。

(3) まとめ

今年度急激に進んだICT機器の活用を追い風に、より効果的な指導方法を今後も探していきたい。

富山国際大学付属高等学校即興型ディベート研究報告書

Darren Hamilton
富山国際大学付属高等学校

(1) はじめに

Toyama University of International Studies High School began parliamentary debate activities in 2019, first as part of our after school English Debate club, in which we joined our first parliamentary debate contest, and then as part of English class activities. They have since become an active part of our goal to foster critical thinking skills through English communication and are being continued and built upon as a major component of a second-year English class.

(2) 実践内容

After first trying parliamentary debate activities with students in our English Debate club, we then set out to incorporate these activities into a second-year English Conversation class for advanced English students. In preparation for debate activities, students at our school engage in intensive English Conversation classes. Still, due to the need to think quickly and respond thoughtfully with little preparation, we were hesitant to throw too much at students at once, beginning these activities with relatively simple topics and keeping the debate time limited to keep them motivated. Despite this, we found that most students caught on rather quickly and many were able to speak at length as we gradually introduced them to the parliamentary system. After running a series of mini-debates where we would run through first and second-speaker positions in multiple rotations, we eventually shifted to the full PDA format, doing one full match per 50-minute class with multiple groups of students.

This year, though COVID-19 presented us with many challenges, there have also been some unforeseen opportunities. First, we have begun to conduct all in-class debate activities through Google Meet. While first and foremost a safety precaution, this has provided opportunities for more serious students to debate even outside of school hours. Also, in contrast to last year, we have started to introduce parliamentary debate activities earlier in the year and at a faster pace. Building off what we learned previously, we began debate activities with less limitations, engaging students in more challenging topics and expanding the time limit to give them a chance to formulate their ideas more fully. As part of these introductory activities, students are given no

preparation or writing time. We have found that this keeps them from the initial speaking limitations that may come from relying on a script, forces them to listen actively to their partner, and helps prevent the hesitancy that may arise from the difficulty to choose what to say next. In terms of building speaking confidence for debate, it seems to be effective thus far.

(3) まとめ

In-class parliamentary debate activities have helped to get our students engaged in communicating complex ideas in English. From our efforts, many students at our school have now become more interested in debate, joining various parliamentary debate contests, including international online contests in Korea and Malaysia and even challenging the longer parliamentary styles like the Asian and British styles. In contrast to the previous year, we have started in-class student debates earlier in the school year and at a slightly higher level. In the second and third semesters, we hope to further sharpen their debate skills, getting students fully engaged in English parliamentary debate and teaching them the necessary techniques to work together, and think quickly and critically about a variety of complex topics.

長野県松本県ケ丘高等学校即興型ディベート研究報告書

池上 博

長野県松本県ケ丘高等学校

(1) はじめに

授業にPDA方式のディベートを導入して4年目になる。1年目は3年の私立文系の選択講座(週3回)のすべてをPDA方式+HEnDA方式のディベートを行った。2, 3年目は3年の選択講座に加え, 英語科でのディベートプロジェクト, 1年生の短期集中式のディベート授業(3時間)を実施。昨年は2年生の文系講座の英語表現で年間, 計4回のディベート週間を設けた。地方の平均的な高校生で授業で, 抵抗感を持たずにディベート活動の定着をステップが一応固まってきた。

(2) 実践内容

ディベート活動は年数回の実施ではなかなか定着しない。また, 月1回といった間隔をあけても身につかない。数時間連続してディベート週間として実施するのがよいと考えた。最初の段階ではトピックを固定し, 同じチームで肯定, 否定をそれぞれ2回経験することにした。

こうすることで, チームの団結や協力を促進し, また, チームの成績を累積し, 表彰することで意欲を喚起することにした。1回のディベートプロジェクトは次の2つのパターンで行った。

- 1 対象者: 2年文系2講座 82名 英語表現の授業。(理系より1単位多い時間を利用)
- 2 場所: 教室と視聴覚教室
- 3 担当1名と係生徒(ジャッジの中から指名)

A 準備型プロジェクト

- 1 限 チーム発表(3, 4人で12チーム), 資料の提供, チーム内による読み合わせと準備
- 2 限 Round 1・2 2教室で8チームが試合, 4チームがジャッジ。ジャッジは3票を持つ。
- 3 限 Round 3・4 2教室で8チームが試合, 4チームがジャッジ。ジャッジは3票を持つ。
- 4 限 Round 5・6 2教室で8チームが試合, 4チームがジャッジ。ジャッジは3票を持つ。
- 5 限 準決勝, 決勝

(後日授業の冒頭で1位~4位とBest Debater 8人を表彰)

B 即興型プロジェクト (PDAで過去に提供された簡単なトピックで)

(1時間に2試合をするため, あらかじめトピックのみ提示しておく)

日程は同じ

(3) まとめ

即興型でなくトピックを固定したり, あらかじめ提示することで, チーム内での連絡, 準備を行うことができ, また, 4回繰り返すことで, トピックへの理解が深まる。事前に英語での資料を与えることで, 読解にもつながる。また, 成績を累積し, 生徒の前で表彰すること。3位決定戦, 決勝を全員の前で行うことで, 格段に発表能力が伸びた。

即興型英語ディベート授業導入研究報告

田中 貴義

三重県立四日市高等学校

本校は平成30年度より5年間、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）校の指定を受けており、「三重・四日市から世界へ！新たなる価値を創造する国際科学技術人材の育成」をテーマとして日々の授業、諸活動の研究・開発に取り組んでいる。

国際舞台で活躍するために必要な資質・能力を育成する取組の一つとして注目したのが、PDA即興型英語ディベートである。昨年度（令和元年度）より1, 2年生の希望者を対象にPDA即興型英語ディベートに参加し、校内体験会（5月）、東海公立高校ディベート交流大会（6月）、全国大会（12月）を通じて参加生徒は経験を積むことができた。全国大会では15位、1名がベストディベーター賞を受賞したが、この時点では授業には導入していなかったため、全校的な広がりにはなっていなかった。授業への導入を模索していたところ、本校には学校設定科目として「論文英語」（2年生文系生徒対象：3クラス120名）という科目があり、私が担当していたため、学年末の2月から3月にかけて授業に導入した。1時限（65分）での指導手順は以下の通りである。

- ①ディベートルール説明、グループ分け（15分）
- ②論題提示、作戦タイム（20分）
- ③ディベート実践（20分）
- ④ジャッジよりコメント、終了（10分）

○授業の様子

授業前は不安そうな表情を見せていた生徒もいたが、全員が役割を与えられ、与えられた論題に対して英語で自分の意見を言わなければならない状況に置かれることで活動に参加できるようになっていった。2回目の授業ではディベート実践を2ラウンド行うことができたが、回数をこなすにつれ英語で話すことに慣れ、「緊張したが、大きな達成感を味わうことができた。」という感想が聞かれた。

○課題、今後の予定

- ・授業実践においては40人を普通教室で行うことは手狭になることが予想されたので、大講義室（200名定員）で行った。今後は新型コロナウイルス対応が必須であるので、密にならない配慮がより必要となる。
- ・授業では40名を8チームに分け、4試合を同時に行った。ジャッジが4名必要になるため、校内体験会の経験者を指名した。ディベート経験生徒を毎年養成する必要がある。
- ・令和2年度の「論文英語」の担当者は別の教員に引き継ぎ、ディベートの授業導入は継続して行っていく。授業、ディベート行事への教員の参観は絶えず呼びかけており、ディベート指導が可能な教員が今後増えることが期待される。

福岡県立城南高等学校における即興型英語ディベート実践

福岡県立城南高等学校

(1)はじめに

平成26年度から学年進行で即興型ディベートの指導を始め、本年で7年目となる。現在は全学年で実施をしている。1学年ではディベートのフォーマットを身につけ、英語で意見を述べることに慣れるところから始め、2学年では内容のある議論ができ、他人の意見を客観的に評価できるようにすることを目標としている。3年生では議論を元に、大学入試レベルの英作文を書けるようになることを目指している。

(2)実践内容

本校での即興型英語ディベートの主な特徴は次の3点である。

①1・2年生全員を対象とし、正課授業等で指導

各学期期末考査後から長期休暇中に、正課授業および補習授業で指導している。試合を行うだけでなく、試合のフィードバックや事例研究も行っている。即興で話す際の「瞬発力」育成のため授業に1分間スピーチやリテリングを導入し、ラジオ英語講座も活用してきた。また、内容のある議論ができるよう、背景知識として使える文章（日本語・英語）も配布した。

②外部講師を招聘した特別講座実施

1年生の12月にクラス内対抗戦、2年生では9月と1月にクラス対抗戦を実施。九州大学ESSの学生を審判として招き、指導を受けている。特に、2年生1月の講座は、決勝戦を1・2年生全員に観戦させ、動機付けとしている。該当学年担当の本校教員も観戦し、地域の中学校・高等学校の英語科教員にも公開している。



③ディベート関連英作文問題を定期考査に出題

各学期定期考査（年5回）で、与えられた論題に対する自分の意見を英語で書かせている。事前に行った試合の論題や時事問題等にヒントを得た論題を出題している。

(3)まとめ

上記のような取り組みは、本校生徒の英語力向上に貢献しているようだ。特に英語ライティングとスピーキング能力は、GTECの全国平均を大きく上回っている。

より内容のあるディベートが行えるよう、授業あるいは事前に読ませる題材選びは時間をかけて行っている。また、他教科での学習内容を活かせる工夫を模索している。

熊本県立第二高等学校即興型ディベート研究報告書

平井 和仁

熊本県立第二高等学校

(1) はじめに

私は現在1年生の英語を担当しています。前年度にPDA認定教育ジャッジの研修を受け、ジャッジ資格を頂きました。自分が研修で学んだ即興型ディベートの楽しさを早く生徒にも味わってほしいと思い、6月の学校再開より、早速1年生全員に即興型ディベートを取り入れています。

(2) 実践内容

(あ) 授業の方法

- ① ペアになり互いでGovernmentとOppositionを決める。
- ② 1人でPM (LO)・MG (MO)・LOR (PMR) の3役を務める
- ③ 黒板でスピーチシートの説明をしながら、ディベートの順番に進めていく。
- ④ 論題は教科書の内容に関連したmotionとし、授業との関連性を持たせる。
- ⑤ スピーチに関しては、まずは日本語でディベートを行い、話す内容を英語に変える練習をしていきながらディベートの型を先に入れることを目標とし、慣れさせていく。
- ⑥ 生徒は全員GovernmentとOppositionの両3役を必ず行うこととし、生徒が慣れてきたらチームに分かれて即興型ディベートに取り組んでいく。

(い) 既往の授業との比較

全員に役割がある点が良い。スピーチシートをもとに積極的に取り組むことで、毎回授業があつという間に終わるので、誰一人として飽きることはない。

通常のグループワークにはないスピード感がある。また日本語で最初は慣れさせていくことで、「話すこと(やりとり)」に対して英語での抵抗感なく積極的に話し、また「英語でこの表現はなんと伝えればいいか」と学ぶ意欲向上に繋がる。生徒たちはディベートをする楽しさを感じており、今後も成長が楽しみである。

(う) 考察

通常のペアワークであると「論理的やりとり」の部分が不足しているものが多く、英語が得意な生徒中心の活動に陥りがちなものが、即興型ディベートであると、「論理的に2項対立の図式をもとに英語以外の力も必要とされる」ので、英語が苦手な生徒も積極的に関われる点が良いと思う。

(3) まとめ

1学期は引き続き週に1回は即興型ディベートを行い、ディベートの型を習得し、2学期からは英語を積極的に用いてチームで取り組むようにする。また本校はタブレットや各クラスにプロジェクターとwifiが設置されている。これを用いてクラス対抗即興型ディベートをZoomで行うなど、より積極的なオンラインディベートにも取り組みたい。

参考文献：授業でできる即興型英語ディベート 著者：中川 智皓

即興型ディベート研究報告集 PDA20-1

発行日 2020年8月8日

発行所 一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会

大阪府堺市中区学園町1-1 大阪府立大学 工学研究科 機械工学分野 中川研究室内